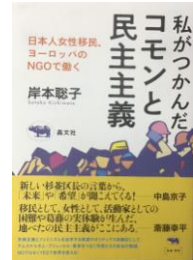


岸本聡子『私がつかんだコモンと民主主義』を読む

久しぶりに、読み出したら止められない本に出会った。写真は岸本聡子・東京都杉並区長の本である。住民訴訟「原告」となり、何だか忙しいので読み進むのに苦勞した。多くの人に読んでもらいたいので、とりあえず紹介して、感想めいたことをすこし書いていこう。まずは、本書冒頭から。



この本は、ロストジェネレーションに生まれた日本人女性である私が、日本人とオランダ人の国際結婚に葛藤しながら、ヨーロッパの移民として、学歴もお金もないところから働いて、子育てして、「自分のことは自分で決める」を貫いて生きてきた記録だ。同時多発テロからコロナ危機まで、世界の激動の20年の中を、お金儲けからは程遠い「コモンズと民主主義」や「気候正義と多様性」を追求して、仕事にしてきた。その20年間を振り返ってみたい。それがいま、世界に同時多発的に起きている「下からの民主主義」を後押しするものになればと思う。

本書が書かれたのは2020年夏。それから2年後には一運命のいたずらか、宿命的な出会いが、私は東京の杉並という都心の地で、さまざまな市民運動を続けてきた人たちから要請を受けて、あれよあれよという間に区長選挙の候補者になった。2022年4月、ゆっくりどころか、いきなり草の根市民選挙に突入した。

そして6月20日、現職区長をわずか187票という僅差で破り、私は区長選挙に当選した。住民と寄り添う区長を出したいという人たちの切なる思いが集まった選挙だった。選挙の期間中の私は候補者として何もかもが初めてで戸惑い、精神的にも肉体的にも大変だったのに、今は楽しかったことしか覚えていない。けんかと対話と笑いがたくさんある選挙だった。今まで一貫して、市民社会の立場から調査や政策提案をしてきたが、はじめて公職の立場で責任ある仕事をするようになった。自分と意見を異にする人たちの声を聞き、対話の輪を広げていくよき進行役でありたい。そして自分の統合性とビジョンを失うことなく、自分の人生の新しい章を書いていこう。

本書は表紙帯で斎藤幸平さんが「移民として、女性として、活動家としての困難や葛藤の実体験が生んだ、地べたの民主主義がここにある」と述べていることに集約される。斎藤さんからヨーロッパを中心とした若者の運動について情報を得たが、本書から岸本さんの実体験から、より生々しい動きを知ることができた。「私にとって運動とは問題を解決するために自分の考えや価値を言葉にして共感する人々とつながる作業であり、生きることそのものだ」という言葉が、とりわけ印象に残った。

『水道、再び公営化!』を読んで岸本さんを知った。グローバルに活躍する岸本さんが、杉並区長選に立候補することを知り、さらに関心をもった。本書を読んで岸本聡子という人を私なりに理解できた。杉並区長としての幅広い活動と活躍を期待したい。

(2022年8月20日)